

公民科倫理における教科書的真理の系譜

- M・フーコーの「真理」概念をルネサンス思想の教科書的解釈から発掘する -

千葉県立千葉東高等学校 教諭 片岡 勝規

1. フーコーの語る「真理」

わたしたち教師が「真理」について語るとき、自分たちも真理を生産する側の立場にいるということに自覚的であるべきだろう。たとえば、試験問題の作成と採点の中で描かれるとxの境界線は、文部科学省によって権威づけられ、教科書によって示された真理の再生産の営みの軌跡であるといえるのではない。

ミシェル・フーコーは『言語表現の秩序』のなかで、真なる言説（ディスクール）を生み出し、真実と虚偽を分割する「真理への意志」という概念を提示している。それぞれの時代の知の枠組み（エピステーメー）は、真理への意志によって行われる真理と虚偽の分割によって形成されるが、それは時代とともに移動する歴史的なシステムであるということ。また、真理への意志は書物、出版や教育などの制度によって支えられると同時に、さまざまな言説に圧力や拘束力を加えるということ。つまり、フーコーは真理を「発見すべき、あるいは人に認めさせるべき真なるものの総体」としてではなく、「われわれが真と偽を見分け、真なるものに特定の権力作用を付与するときを使う、もろもろの定規の総体」¹としてとらえているのである。

さて、私たち「制度」が公民科倫理の授業の中で、フーコー的な意味での真理を語ろうとするとき、どのような自己言及が可能になるのだろうか。たとえば「教科書的」な真理の在り方と一般に流布する諸学説の間にある断層の存在を指摘することから、高校生向けの真なる言説の生成の系譜を示すことができないだろうか。以下、ピコ・デラ・ミランド

ラとルネサンス思想を対象として取り上げ、このテーマを考察してみたい。

2. ピコの自由意志論が近代的人間観であるという真理

この教科書的真理の生成は、「人間の尊厳」という用語がピコ・デラ・ミランドの著作の題名と倫理の学習指導要領の文面とに共通して存在していることに由来する。

『高等学校学習指導要領解説 公民編』では、「人間の尊厳と生命への畏敬」という指導要領の文面に対して、「先哲が人間をどのようにとらえ、人間の尊厳についてどこに根拠を求め、どのように考えたかを手掛かりに人間の尊厳について理解を深め」ることの重要性が説かれている。これにしたがって、第一学習社の教科書『高等学校倫理』は次のように記述している。

イタリアの人文主義者**ピコ＝デラ＝ミランド**は、『人間の尊厳について』のなかで、人間は**自由意志**によって自分の存在のあり方を決定できること、その点にこそ**人間の尊厳**があることを強調している。人間が野獣のような存在となるか、神に近づくような存在となるかは、人間の自由な選択にゆだねられている。このようなピコの人間観には、自分の人生を自分の意志で切り開こうとする近代人の姿がよく表現されている。

これは教科書におけるピコに関する記述の代表的なものなのだが、彼の人間観はあたかもカントの自律的な人格の尊厳や、サルトルの自由な主体としての実存を先取りしているようにみえる。また、このような人間観を根拠にして、ルネサンスの人文主義は「ギリシャ・ローマ文化の復興を通じて、中世の教会

中心のあり方から自由な、人間中心のあり方を追究すること」(東京書籍『倫理』)が目的であることが真理として示される。

たしかに、ピコの間人観はイタリアルネサンスの代表的なものといえるだろう。異端の疑いありとして教皇によって中止された討論会の開会の辞として書かれた、ピコの『演説』の中には、スコラ哲学はもちろんのこと、古代ヘルメス主義に始まりピュタゴラス派、新プラトン主義、ゾロアスター、ユダヤ教のカバラ主義、自然魔術に至る引用がちりばめられている。ルネサンス期に盛行をきわめた魔術的な世界観とシンクレティズム的な傾向が色濃いこの著作は、ピコの死後『人間の尊厳についての演説』²と名付けて出版され、当時の人々に広く知られるようになる。

その演説の中で、神は特権的な被造物として人間を世界の中心においたことが描かれる。その特権とは、あらかじめ神によって本性を決定されることがなく、自己の自由意志に基づいて自分の本性を決定することができるということである。だからこそピコは、人間が神的存在となって神の高みへ至るべきだと主張する。そのための方法として引用されるのが各種の神秘主義的思想なのだ。

教科書には描かれないこの世界観³は、百科事典では次のように説明されている。

これらの魔術的思考は、現在でこそ合理的(理性的)思考の対極とされるものの、ルネサンス人にとっては相互に協同しうるものであって、相反的なものとして扱われているわけではない。むしろ、当時の最先端の学知として、実証的科学や文献学とともに、ルネサンス文化の枢軸を占めていたのである。
平凡社『世界大百科事典』、項目「ルネサンス」の一部

自由意志に尊厳を認めるピコの間人観の背景には、このようなイタリアルネサンス特有の魔術的な世界観があった。しかし、教科書

的真理は歴史的世界観から切り離れた人間観を示すことによって、生徒が現代的な世界観から「人間の尊厳」についての理解を深めることを可能にする。「神中心の文化から人間中心の文化へ」というルネサンスのチャートも、こうした概念の切り取り作用によって、はじめて可能になる⁴。もちろん、これはルネサンスの魔術的な世界観を虚偽として排除しているわけではない。「生徒の発達や学習段階に適した」「細かな事柄や高度な事項・事柄には深入りしない」(『学習指導要領』倫理内容の取り扱い)という教育的配慮から除外しているのである。ここに教科書の真理の生成の系譜がある。

3. 授業でのアプローチの可能性

ルネサンス思想だけでなく、倫理の多くの分野で「切り取りのシステム」が機能している。たとえば、プラトンやアリストテレスが民衆の支配としてのデモクラシーを否定的にとらえていたという点についても教科書は黙して語らない。もちろん、現代的な人間観や世界観から遡行して先哲の思想を解釈すること自体は非難される筋合いのものではない。ただ、ソフィスト的な意味での真理の相対性ではなく、フーコーが問題とした「真理」のあり方を授業の中で生徒に説明するための素材に恵まれているということは確かである。

¹ 『ミシェル・フーコー1926-1984 権力・知・歴史』(新評論, 1984, p.96) 1977年のフーコーへのインタビュー「真理と権力」参照。

² 『人間の尊厳について』(ジョバンニ・ピコ・デッラ・ミランドラ著, 大出哲, 阿部包, 伊藤博明訳, 国文社, 1985)

³ 唯一、東京学習出版社の教科書『倫理』はルネサンス運動への新プラトン主義的神秘思想の影響を記述していた。しかし新課程版では削除されている。

⁴ 『言葉と物』でフーコーが指摘した「人間の誕生」はルネサンス期も古典主義時代も終わった18世紀半ばの生物学、言語学、経済学が成立した時代の出来事である。